

素 顔 拝 見



医歯学系・准教授
(う蝕学分野)

吉 羽 邦 彦

こんにちは、口腔健康科学講座う蝕学分野の吉羽邦彦と申します。本学を卒業して20数年、今更素顔拝見はないだろうと思いましたが、この間に講座の改変や口腔生命福祉学科の新設、歯学部附属病院の医歯学総合病院への統合、研修医制度の義務化等の大きな変化があり、また教職員のほとんどが変わってしまったと思いますので、改めまして自己紹介をさせていただきます。

出身は栃木県最南端の藤岡町（市ではありません）。関東平野北部の特に特色のない田舎町ですが、敢えて挙げれば、渡良瀬遊水地、三轟山（みかもやま）、栃木山守也（第27代横綱）、田中正造というところでしょうか。

新潟に初めて来たのは大学受験の時でした。先ず驚いたのはその積雪でした。当時はまだ上越新幹線は開業しておらず、高崎から「特急とき」に乗り継いで新潟までやってきました。「国境の長いトンネル」を抜けるとまさしくそこは「雪国」でした。それも雪の壁。こんな世界があったのかと、その時の光景は今でも忘れられません。どんよりとした新潟の冬は今でも苦手ですが、近年は温暖化の影響か、雪の降る時期も遅くなり、また以前より晴れる日が多いような気がします。

歯学部卒業後、歯科保存学第一講座（現在の口腔健康科学講座う蝕学分野）・岩久正明前教授のもとに大学院生として入局させていただきました。修了後、約半年間の佐渡・小木町立歯科診療所勤務を経て大学に戻り、現在に至っております。

私の主な研究テーマは「象牙質／歯髄複合体の形成、修復・再生および生体防御機構の解明に関

する研究」です。う蝕（虫歯）治療の際、象牙質や歯髄（歯の神経）をできる限り保存し、機能させていくための基礎的研究と臨床応用法の開発を目的としています。大学院生時代は、口腔解剖学第一講座（現在の顎顔面再建学講座硬組織形態学分野）・小澤英浩前教授のご指導のもと、歯髄の石灰化機構の解明の一環として、電子顕微鏡を用いた形態学的観察を行っておりました。

その後も直接覆髄（露出した歯髄を保護する治療法）後の歯髄組織修復機構、特に象牙質の修復・再生機構の研究を、主に動物実験等を用いて行っておりましたが、歯の発生過程における象牙質の形成と直接覆髄後の修復象牙質形成の相違を見いだすことが重要と思うようになりました。そこで欧州における歯の発生研究の第一人者であった、ルイ・パスツール大学医学部（フランス・ストラスブール）、Jean-Victor Ruch 教授に歯の発生機構の研究をしたい旨のお手紙を書いたところ、それまで一度もお会いしたことがないにもかかわらずご快諾をいただき、1995年11月から約1年間、留学する機会を得ることができました。ここでは歯の形成過程における細胞分化に重要な役割を果たしている細胞外マトリックスに関する研究に従事させていただきました。Ruch 教授はマウス胎児の顎から外科用メス（No.11）2本を用いて歯胚（歯の原基）をあっという間に取り出すという神業の持ち主で、動物実験のほとんどを自ら行っていました。その後、歯胚取り出しのテクニックを伝授していただこうと1998年と2002年の二度に渡り、短期間ではありましたが Ruch 教授のもとを訪れて来ました。残念ながら2003年2月に急逝しましたが、彼の遺志は定期的で開催されている国際会議“International Conference on Tooth Morphogenesis and Differentiation”に引き継がれています。Ruch 教授は今でも私にとって研究の神様であり、また彼のフレンドリーな人柄と研究に対する真摯な態

度は、研究者としての憧れでありまた目標です。現在はこれまでの研究をさらに発展させるべく、興地隆史教授のご指導のもと、レーザーの応用や新しい覆髄材 MTA に関する研究を進めているところです。

さて、堅い話ばかりになってしまいましたが、最後に趣味の話を少しさせて下さい。新潟は直ぐそばに海があり、振り返れば飯豊山脈、二王子岳、五頭山、菅名岳と連なるアウトドア天国です。海といえば魚釣りです。魚釣りは子供の頃から好きで、暇さえあれば実家近くの小川や遊水地内に点在する沼で釣り糸を垂れていました。新潟に来てからは勉学(?)、クラブ活動等忙しく、しばらく遠ざかっていましたが、大学院修了後の佐渡出向を機に再燃しました。診療を終えると目の前の防波堤に行ってアジ釣りです。20cm前後のアジが入れ食い状態ですが、2、3匹持ち帰り、たたきや塩焼きにして一杯やってみました。週末は羽茂港や赤泊港でキスや鯛釣り、時には磯でサザエ、アワビ取りと、海を満喫してきました。現在も週末に時間があれば小学生の息子を連れ出し、寄居浜のテラポットや防波堤で豆アジやアイナメ釣りを楽しんでいます。

もう一つは山歩きです。登山というほどものではなく、日帰り、軽装、必要最小限の装備を基本とする軽トレッキングあるいはハイキングという範疇のものです。大学生時代には弥彦山や五頭山程度のものでしたが、飯豊山脈の大石山～杵差岳登山時の、頂上に達した時の爽快感と一面に広がる高山植物のお花畑を目の当たりにし、山歩きが病みつきになりました。他にもサイクリングやアップルのマック改造等いろいろ楽しいことがあるのですが、紙面も尽きましたのでこの辺で終わりにしたいと思います。取留めのないお話しにお付き合いいただき、ありがとうございました。

最後になりましたが、原稿の締切日を過ぎていてもかかわらず、辛抱強く待っていただいた編集委員の皆様へ御礼申し上げます。

*



医歯学系・准教授
(小児歯科学分野)

田 口 洋

こんにちは。病院講師になった折にも書かせてもらいましたので、二度目の登場です。とは言っても、すでに20年以上の歳月が経ってしまいましたから、趣味でバックナンバーを集めていらっしゃるご高齢の方しか、どんな内容であったのかはわからないと思います。私も忘れてしまっているので、似たようなことを書いてしまうかもしれません。

岡山県岡山市生まれの51歳です。小中学校のときは、いろいろなあだ名で呼ばれるので自分の名前が嫌いでした。このまえ、明倫短期大学から実習に来てくれている歯科衛生士学科の学生さんに、私の名前が正しく読めますか、と聞いたところ、実にあっさり、きょとんとしながら、「よう」と読んでくれたのには大いに感激しました。学校の先生など初対面の人には、いつも「ひろし」としか読んでもらえませんでした。最近の若い人々には、北海道を拠点に活躍しているタレントの清泉洋さんの存在が大きいようです。小児歯科に来てくれる子どもの中に、「遙」、「要」、「陽」と書いて、そのまま音読みの名前を見つけると心の中で密かに喝采しています。

33歳のときに、文部省の在外研究員としてスウェーデンを拠点に、ヨーロッパ北部の4ヶ国に行かせていただきました。スウェーデン南部の地方都市ヨンショーピンにある卒後教育研究所の矯正科での滞在期間が5ヶ月と一番長く、歯の萌出障害を中心に、こっちは見学することさえない矯正治療を多く学びました。このときのクロル教授からの手ほどきと、恩師野田先生の指導を受け、子どもの歯の萌出障害を臨床と研究で大きく発展させることができたと感じています。ただ、同じ研究所の小児歯科の先生たちと昼飯で一緒になると、矯正科に来た理由を盛んに聞かれるのには閉口しました。また、北極圏に近いので夏は昼が長

くて最高ですが、秋になると朝8時でもまだ真っ暗の中を出かけ、5時過ぎに夜空に星を見ながら帰宅しました。一番の失敗は、スモーキングルームの灰皿に器用に並べてある吸い殻を捨ててしまい、煙草飲み全員からひどく恨まれたことです。当方で1箱400~500円程度はしていましたから、吸い殻を集めて巻き直して吸っていたわけです。

学位論文のテーマは歯根膜から生じる顎反射でした。ネズミを使った実験でしたが、その後ヒトでもほぼ同じ結果が得られました。商業誌の特集で座談会に呼んでもらったり、大阪であった国際口腔生理学会で講演させてもらったりと、懐かしい思い出がたくさんあります。大学院時代の恩師島田先生が、虫垂炎をこじらせて1ヶ月間も入院されていたのに、退院直後にご自宅に押しかけて英文の発表原稿の手直しをお願いしたり、朝の5時頃まで先生を飲み連れ回したりしたこともあります。島田教室には多くの臨床教室から大学院生が集まっており、多い時には20名ほどで月1回のペースで深夜まで勉強会をやりました。その時の仲間は、多くが新潟大学からは去ってしまいましたが、今でもときに友好を暖めており、私にとっては心おきなく話のできる、かけがえのない友人たちです。

趣味は、読書（時代小説）と下手の横好きの将棋です。剣客商売のちゃんばらや鳥羽亮、佐伯泰英らの捕物帖もおもしろいですが、藤原緋沙子、北原亜依子、宇江佐真理といった女流作家の人情物もなかなか捨てがたいですよ。鬼平の料理にも憧れています。日曜のNHK杯はビデオに撮ってでも必ず見ます。医局にいた3段の小岩井君が職員の将棋大会に出て、向かうところ敵無しで優勝しましたが、その指し回しは瞠目に値するものでした。以前の「月下の棋士」や、今の「81ダイバー」は、役者さんの駒を持つ手がぎこちなく、どうしてもドラマに入り込むことができません。もっぱら「激指2」や「東大将棋5」のソフトが相手で、ときにネットの「将棋道場」に顔を出します。ハンドルネームに「よう」が入った弱っちいのがうろろしていると思ったら、是非応援してやってください。

✧

医歯学系・准教授（生体歯科補綴学分野）

富 塚 健

平成19年6月1日から新潟大学にお世話になっております富塚です。現在の所属は生体歯科補綴学（平成20年7月1日より）ですが、赴任当初の名称は加齢歯科補綴学でした。昨年度は途中からの赴任だったこともあり、診療と学生実習の指導のお手伝いをさせていただく程度でしたが、今年度は診療の他、4年生の歯冠修復学の講義、実習、5年生の総合模型実習、6年生の臨床実習を担当するようになり、週の半分は学生教育に携わっています。こちらに来る前は10年以上も医学部のいわゆる歯科口腔外科におりましたので、歯学部にとっぷりつかった生活（当たり前ですが）を堪能させていただいております。

私は20年以上も前に歯学部を卒業いたしました。その後、補綴系の大学院に進み、インプラントに関連する研究をしてきました。大学院修了後、2年間医員として勤務した後、前述の医学部の歯科口腔外科に勤務することになり、昨年こちらに移ってまいりました。私の経歴はおそらく新潟大学歯学部の教員の中でも極めて異色だと思いますし、そういう点からおそらく、赴任当初は良くも悪くも好奇の目で見られていたのではないかと思います。今こうして1年余りが過ぎ、周囲の方々の見方、もっとはっきりいえば私への評価が固まりつつあるこういう時期になって自己紹介的な文章を書かなければならないというのなかなか難しさを感じます。お互いに訳の解らないうちに、勢いで書けた方がよっぽど楽であったのかもしれない。

さて、それはともかく。新潟の印象について少し述べようと思います。3つの単語で表すと「勤勉」、「親切」、「寒い」といったところでしょうか。以前から新潟大学といえば様々な研究領域においてその業績には目を見張るものがありました。こちらに来てみると著名な先生方はもちろんですが、若手の先生でも頑張っている方が多いことに感心させられました。また、学内外

を問わず親切にしてください機会が多く、大変ありがたいことだと感謝しております。そして、3つ目があるいはもっともインパクトが大きかったかもしれません。

新潟という土地はこれまで学会で数回訪れたことがあるのみでした。父親の仕事の関係で生まれたのは名古屋なのですが、これまでの人生のほとんどを関東で過ごしてきた人間にとって、正直当地の気候はなかなか厳しいものがあります。初めて経験した冬、傘をさしているのに地面から砂交じりの雪が吹き上げて顔にパチパチ当たるときなど、勘弁してください、という感じです。本格的に降る霰もこちらに来て初めて経験しました。現在、西大畑の職員宿舎に入れていただいています。防風林を抜ける風の音と日本海の海鳴りを聞きながら夜道を一人帰るときは思わず小走りになっていたりします。そんなことを言っている私ですが、実は母方の祖母は三条の出身であり、新潟にまったく縁が無いわけではありません。また、関東には意外に新潟出身や縁のある方も多く、話もよく聞いておりましたので覚悟の上のはずだったのですが。

最近よく考えるのは、はたして私が新潟大学にどのくらい貢献できるのだろうかということです。様々な面で方法や流儀の違いがあるにせよ実力不足の部分は素直に認めなければなりません。皆様にはこれからどうぞよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

✦



医歯学系・助教
(歯科基礎移植・再生学分野)

小 神 浩 幸

みなさん、こんにちは。平成19年6月より歯科基礎移植・再生学分野の助教としてお世話になっております、小神浩幸です。「はじめまして」の方が適当かも知れません。というも、私はこれまで神戸にあるベンチャー企業の社員であって、生

まれも大学も新潟ではなく、はるか北にある北海道由来の人間なのです。

私は北海道富良野市の横の小さな町、今はダム建設であらかた水没してしまった町で小、中学校を過ごしました。電気・水道は通っていましたが、丸太小屋でもありませんが、限りなく「北の国から：純と蛭」に近い生活を送っていました(笑)。高校へ入ってからは電車通学でしたが、冬に手動のドアが凍って開かず、学校に行けなかったこともしばしばです(もちろん、無人駅です)。

大学、及び大学院は理学部(歯学部ではありません……)を卒業しています。生体内の代謝(数式)モデルを使って、酵素や遺伝子の研究をしていました。対象は何と植物。学位論文に至っては“高山植物”です。富士山に連日登っていました。当時、趣味だった登山というカトレッキングが微妙に影響していたのかもしれません。

最初の就職先は製薬会社でした。現在の社名でいうとサノフィ・アベンティスの生化学研究室で骨との関わり合いが始まりました。そこではBMP-2やBMP-11の生産・精製法や骨粗しょう症診断薬の開発などをやっていました。もちろん、新規活性物質の探索も。連日、由来が不明の人骨を大量に砕いて、ひたすらタンパクを抽出したのを思い出します。

その後、再生医療を目的としたベンチャー企業へ就職。そこでは間葉系幹細胞とヒト多血小板血漿(PRP)を組み合わせて、歯槽骨を再生することが目的でした。当初は名古屋大学に派遣され、最近培養皮膚で薬事承認を得たベンチャー企業のJ-TECに関係する先生方にもお世話になりました。現在、新潟大学歯学部で臨床応用されている培養骨膜シートに出会ったのもこの時です。

その後本社のある神戸に移り、細胞治療品に関する薬事承認を目指す、いわゆる“開発研究”に携わりました。厚生労働省に提出する予定の資料に、現在お世話になっている川瀬先生や奥田先生の論文を引用しまくったことは記憶に新しいです。また、培養骨膜シートに関する研究が新潟大学で進んでいく様子を知っては喜んでいました。その後、何とその川瀬先生をはじめ、関係の先生方に仕事の機会を与えて頂き、現在に至っており

ます。大学での仕事は初めての経験で、不慣れで見当が外れがちな仕事ぶりは毎日が反省の日々です。名前は申し上げませんが、御迷惑をおかけしている諸先生方に心よりお詫び申し上げます。どうかもう少し、できればなるべく長く時間を与えて下さい。カイゼンの努力は進めております。

最後に、私の家族について紹介したいと思いません。妻は同じく新潟大学 医歯学総合病院のセルプロセッシングセンターに勤めています。再生医療に使用される治療用細胞を生産する施設です。それと写真にも写っている娘、咲帆（さほ）です。親になって初めて実感したことです。子供の成長が日々の最大の癒しになっています。咲帆は何より食べることが好きで、我々夫婦と息がぴったりの子です(笑)。さらに今年の12月には新しい家族が生まれる予定で楽しみです。目下週末に暇を見ては、県内のおいしい食べ物を求めて、家族で西へ東へパトロール中です。何か耳よりの情報がございましたら是非ご一報を。

今後とも、皆様のお力をお借りしながら研鑽に努めたいと思っています。どうかよろしくお願い致します。

＊



医歯学総合病院・助教
(歯周診断・再建学分野)

伊藤 晴江

歯周診断再建学分野に所属しております伊藤晴江です。今回素顔拝見とのことで原稿依頼を頂きましたので近況をまじえて軽く自己紹介させていただきます。

生まれは新潟、育ちも新潟そして現在に至るまで新潟にすんでおり、他の土地に住んだことがありません。今でこそ秘密のケンミンSHOWなど県民性や特産物など紹介している番組もありますが、私が高校生くらいの頃まではそういった番組は無く、自分が新潟県人なのだ意識することも無く過ごしていました。

お祭りに行ったらぼっぼ焼きを買って歩き食いをしながら屋台をみてまわる。学校帰りや休みの日にはみかづきに寄ってイタリアンを食べ、イタリアンに飽きてきたら、たまにホワイトイタリアンを食べるということがあたりまえのことだと思っていました（そのころカレーイタリアンはなかった）。

しかし、大学に入学すると、当然のことながら大勢の新潟県以外の出身の人と接することとなり、自分が新潟という地方に育ってきたのだと意識するようになりました。

イタリアン？ これって全然イタリアンでは無いよね。とつっこまれたり、ぼっぼ焼きって何？ いったい何からできているの？ といわれて初めてこれらが新潟にしかないものだとなりました。また、大学で新潟県以外出身の同級生とはなしている時に

私：「今日、先生にかけられそうなんだけどどうしよう〜。」

友：「かけられそう？ 何を？」

私：「いや何かは分からないけど、出席番号の日付だし」

友：「ふ〜ん。」

また、友人が自動車学校に通っていたときのことですが、

友：「この間の路面研修の時に乗ってくれた教官が新潟弁でわかりにくくて」

私：「そんなになまってるの？」

友：「なまりもあったけど、“そこで右に曲がってみた”って言われたときにどうしたらいいのか分からなくて。」

私：「???。」

友：「“曲がってみた”っていわれたから“いえ曲がってません”って答えたらまた“いいから曲がってみた”って言われて」

私：「……?。」

友：「だって“曲がってみた”って過去形でいわれたから“曲がってない”って答えたのに。それでもまた同じこといわれたから今度は何か見たかという意味かと思ったんだけど何も見えないし。どうすればいいのか分からなくて本当に困ったんだけど。」

私：「……！」

もちろん新潟以外の県からこられた方々の方がショックは大きかったと思いますが、新潟にずっといた私にとって新潟が地方都市の一つにすぎないのだと強く実感することになりました。

大学卒業後は新潟大学の大学院に入学し、歯周病学講座でお世話になりました。大学院時代ではいろいろな場所で開催される学会に参加させて頂きました。大学院時代も含めて今までに東京、大阪、岡山、広島、長崎、北海道など、また、海外ではアメリカ、オーストラリアの学会にも参加させて頂きました。長崎はすごかったですね。すごい斜面に家が立っていて。家の2階付近に隣の家との玄関があるといった様子で急斜面に並んで立っている様子に驚きました。また、キリスト教徒の方も多いたので、同じ日本人でも風土も気候も歴史も違えば考え方も違ってくるということを感じさせられました。このように色々な経験をさせて頂き、私も少しずつ世界が広がってきたように思います。

“井の中の蛙”状態にならないように視野を広げつつ頑張っていきたいと思っていますので今後とも宜しくお願い致します。

✧

医歯学系・助教（歯科侵襲管理学分野）

弦 卷 立

新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻顎顔面再建学講座歯科侵襲管理学分野の弦巻です。自己紹介的な文章を歯学部ニュースに載せるので、書いてくださいと言うことでしたが、特に自己紹介を長々と（1,500字程度）書けるほど自分のことについて思いつくことも無いのであてどなく思ったことなど。

先日、病棟で当時研修医だった先生から「弦巻先生、全身麻酔から覚めないことってあるんですか？」と、いう質問。「う～ん、渡辺淳一の『麻酔』だと、覚めない女性と、その夫、麻酔医が主人公だけど、まず今は覚めないこと無いと思うけど、なんで？」と、質問返し。「私、骨髄移植のドナー登録をされていて、適合したらしく通知が来たので

すが、父が全身麻酔は危険だからダメだといっているんです。」との答え。私は、その先生のお父さんが納得するような答えをその場で見つけられなかったので、「少なくとも、おいらの知っている限り麻酔から覚めなかった患者様は見たこと無いよ、たぶん、ここの歯科麻酔科では開設から一人もいないと思うよ。」と言っておきました。その後、全身麻酔の件ではお父さんも納得された（？）ようでしたが、結局その先生は他の理由からドナーとならなかったようです。

さて、実は、私も骨髄移植のドナー登録をしております。数年前デッキイ401で買い物中、ドナー登録のキャンペーンをしており、以前から興味があったのでその場で採血してもらい、丁寧な説明を受けて（医療関係者だから説明要らないと言ったら、すぐ終わってしまった）、あっけなく登録終了。その後今日まで、適合の通知は未だ来ず……よっぽど特異な白血球型なのかなあと、思いつつ、自分のすぐ近くに骨髄ドナー登録をしている歯科医を見つけてちょっとうれしかった。というのも、今まで歯科麻酔科、医学部薬理学教室をいたりきたりしてきましたが、どちらにいたときにも私の周りには医療関係者の中に骨髄バンク登録をしている人がいませんでした。口の悪い同級生には偽善者呼ばわりされることもありましたが、私からしてみれば、地域の歯科医療に貢献するなんて理由で開業することの方がよっぽど偽善でありまして……

さて、1,500字までまだまだあるので、子供のことなど。上の息子が4歳になるので、ひらがなの書き方でも教えてやるかと、とりあえず自分の名前から始めようと『こ』の字を書いて、「ほれ、これが『こ』だよ、書いてごらん」と言うと、右斜め前に座っていた息子は『リ』の字を見事に書きました。「おいおい、ちがうだろ～～。」という、書いた紙を90度回転させて、「ほらほら～『こ』だよ～～。」なるほど、息子の座っていた位置から見ると、私が書く、『こ』の字は『リ』のように見えるんだなあと、非常に驚くとともに、限りなく透明に近い真っ白な子供の知識のノートに間違った情報を書き込んでしまったかとかかなり焦りもしました。その後、まだまだひらが

なの書き方には上達がみられず、鏡文字を書いたり、ぐるぐる◎を何回もかいて、「『の!』」と試してみたり、なかなか前途多難です。教え方が悪いのかなあと、思いながら、ま、いつかはちゃんと書くようになるだろうと、貸家のふすまや壁に落書きされないことだけを注意しつつ気長に構えています。

と、いつもこんなことを考えながら、6時起床7時半には出勤を繰り返し、いつの間にかこの原稿の締切日すら忘れる忙しい毎日を送っています。

＊

医歯学総合病院・助教（顎顔面口腔外科分野）

池田 順行



初めまして。顎顔面外科学分野の池田と申します。平成12年に本学を卒業し、顎顔面外科（旧第二口腔外科）に大学院生として入局させていただき、修了後も同教室にてお世話になっております。大学入学からずっと新潟にいることになりましたので、すでに約15年をこの地で過ごしていることとなります。青春時代を過ごした新潟にはふるさと以上に愛着のできた今日この頃です。

私は群馬県高崎市にて生をうけ、地元でやんちゃな少年時代を過ごし、すこし離れた新潟の地にやってきました。新潟の地での学生生活は、今思い返しますと部活・アルバイト・酒にあけくれ、学業の方は二の次であったほうかと思えます。授業終了後に部活に行き、その後アルバイト、それから酒を飲みに行くという生活を繰り返し、ほ

とんど睡眠をとらずに講義に出ていました。どのくらい講義を聴いていたかは聞かないでいただきたいのですが、テスト前になると豹変し死にものぐるいで勉強していました。そんな私も5年生になり、いわゆる臨床実習が始まった頃から変わってきた気がします。対“ひと”という関係の中で、得た知識が直接診療に結びつき、また逆に診療するために必要な知識は得なければいけない。あたり前のことであり、気づくのが遅いぐらいかもしれませんが、この頃になり初めて自ら知識を得ることを覚えた気がします。

もう一つ、私の原点となっている経験について少し触れさせていただきます。私は中学、高校、大学とバレー部に所属していました。中高時代の部活動は現在では考えられないくらい厳しいもので、休みは元旦のみ、監督のビンタで鼻血をふいても鼓膜が破れてもボールを追っかけているようなものでした。立てなくなるまでボールを追われ続ける毎日を繰り返し、相当根性がついた気がします。“自分が一番苦しいと思うな。コートの中あるいは他の場面で自分より苦しんでいる人は必ずいる。それに比べればお前はまだまだだろう。”という当時の監督の言葉が今までの私を奮い立たせてきてくれました。そして、患者様やいろいろな仕事に向きあっている今も、自分に対しこの言葉をなげかけています。

私は現在、顎顔面外科に在籍させていただいておりますが、入局を希望したのは2年生の時にその存在を知った時からでした。迷いはありませんでした。口腔外科は顎口腔領域の様々な疾患を対象とし、昼夜を問わずその対応に追われる。そして疾患を治療しつつ常に形態と機能の回復を目指している、という治療の原点が口腔外科の根本に存在しているからだと思えます。入局してはや8年が過ぎました。多くの先生方に指導いただき、また周囲のスタッフに助けられながら、なんとかやってきたといったところでしょうか。新潟大学の顎顔面外科に入局してよかったと思っています。今後は、患者様をはじめ周囲のみなさんのお力になれるようがんばっていかうと思っています。どうぞよろしくお願ひします。